

栄ちゃんの

熱血・演歌塾



おんな川は昭和の時代のスタイルに多く見受けられた四行詩の形式で作られています。最近の歌謡曲では殆ど見かけなくなりましたが、言葉の数が少ない分だけ一言一句に感情表現、情景描写がより多く集約されて練り込められていると捉えて、取り組んで頂ければと思います。

歴史を紐解けば歌謡曲黎明期、昭和ひとケタや十年代の歌は殆どが四行詩で作られ、中には酒は涙か溜息か、や片瀬波、など二行詩の名作もありますが、戦後二十年代、三十年代の歌謡曲全盛時代にもこの四行詩の歴史を受け継いでいます。

私のデビューの四十年代の目ん無い千鳥は勿論リバイバル曲ですからそのスタイルですが、初期の筑後川エレジー、赤い酒などもその四行詩でした。

課題曲のおんな川はそんな時代の残り香が感じられる作品です。オリジナルのスタイルは殆どギターとリズムセクションとコルネットバイオリンをフィチャーしただけの薄い編成でした。

今回リメイクと言う事で、ストリングスを足してキーも半音上げてレコーディングし直しました。詞も作詞の白鳥園枝先生に相談して当時の作品と大分変えて頂きました。

というのはこの歌が最初に作られた頃の三十年前に多く歌われた女性像と現在歌われる女性像は明らかに違うと思ったからです。

あの時代に登場する歌の主人公像はネオン街に生きる女の生きざまを描いた歌が多かった様に思います。しかし最近はそのような女性像は歌謡曲の主人公ではあまり登場する機会が少なくなりました。

今回の”おんな川”は、逆境に生きる普遍的なおんなの気持ちという内容に衣替えしています。

そんな事柄を念頭に於いて取り組んで見て下さい。又今回は男性が歌うおんな歌ですから、男性がこのおんなの心を歌うと言う立場で説明します。一言で言いますと

おんなごろの、芯にある情念を歌い上げると言う事で、おんな歌にとっての直球勝負と言う事です。

又この歌は音域が狭く、下のレから上はファの音まで、最近の歌の傾向の音域と同じ10度音程ですから男性は勿論女性でも十分カバー出来る音程です。それでは具体的に行ってみましょう！～なさけの川が～出だしからこの歌の中で一番トップのファの音です。こんなパターンのは時はプレス（息継ぎ）を深めに取ります。

そしてロングトーンです。音の長さの間にピッチ（音程）がフラットしない様に、

表情は伸びやかに！この様なスタイルは市川昭介メロディで書かれた私の歌、駅、絆川、わかれ港町、女の愛情等良くある私の歌のスタイルです。いわば大川演歌の定番のスタイルかも知れません。

そして～川が～は、こぶしの味わいを大事に！

～あるならば～この入りの音～あ～がこの歌の中のレで最低音です。

たっぷりと低く太い声で柔らかく響かせます。毎回言っていますが、低音部は首や肩の周りの力を思いっきり抜いてソフトに！そしてこの歌の流れから咀嚼すると～あるならば～この女性の希望で有り願望です。

明るいつーンで口角を上げる感じで！もう一度言いますが～あるならば～ここで肩の周りの力みを抜く事が肝要で、次の二行目に行く為の伏線になります。

ここで力むと次の行の表現が活きません。

～溺れて見たい～は躍動的に！男と女の愛憎の渦に自分の総てを投げ出したいと言う強い願望です。

そんな強い意思を持った女の感情を表して下さい。

その情念が揺れ溢れんばかりに！一行目が声の響きや伸びを重点に対して二行目は女の情の振幅を表現します。起承転結をハッキリと歌い分けましょう。

～この私～。はこの歌を歌う女の全体像です。

カメラのアングルで言うとロング（引き）の映像です。レガート（滑らかに）に！

書のスタイルで行けば草書のように流麗に素直に歌い流す感じで！三行目は～どうせさすらい女船～ここで初めてこの女性のネガティブ（後ろ向き）な逡巡する気持ちを表します。

極端な表現かも知れませんが、日本舞踊で言うなら振袖で顔を少し隠していやいやをするように！そんな姿をイメージすると良いかも知れません。

二行目の～この私～と同じ表現で歌っても聞いている人は面白くも何ともありません。

刻々と場面は展開して行きます。

聞いてくれる人がああそうなんだ！じゃ無く、なるほど！と一つ一つのシーンを納得してもらえる様に！

歌は三分間のドラマです。

それに対してもう一度～女船～が繰り返されます。

サビに行く為の助走でも有り一人で生きていく女の悲しみを改めて強調する場面です。ここでは寂しさと、健気に生きる感情を繰り返しのフレーズで同じ言葉を対照的に歌い上げるのも一つの表現の手法です。

最初の～おんな船～は近くの人に！二回目の～おんな船～では遠くにいる人に呼びかける様な気持ちで、大きく歌う事です。

又、二回目の～船～は4拍の長さをきっちりとしつなげましょう。

バイブレーションを大きく掛けて！結びの四行目は～行き着く港の～一行目の歌い出しの様に音域のトップの音です。

ブレスを深く取って！～行きつ～の～つ～の歌い方で味付けを工夫しましょう。～つ～の表現はとても大事です。変な言い方ですが強く、しみじみと。～く～はしゃくり上げる感じです。

～みなとの～は派手な節回しで。こぶしを回しましょう。こぶしと言うよりおおぶしで！

この意味は～みなとの～の細かいメロディを一つ一つ突く様な感じで！歌謡曲の発声は口腔から頭蓋内に声を響かせるのが原則ですが、演歌で言うこぶしは（大川流かも知れませんが）？意識的に鼻腔に響かせます。

そうすることで、扇情的というか柔らかな情感が演出出来ます。

しかし、この～みなとの～場合はおおぶしと言いましたが、この場合の細かいメロディの展開では鼻腔に響きを抜かないで！頭蓋内に声を響かせて大きくメロディを歌い上げて下さい。

次の歌い納めの～あてもない～を印象づける為の仕掛けと歌全体のバリエーションです。

～あてもない～の言葉がこの歌の生命線です。

いわばこの歌の核になる言葉ですね。そこを強調するために

～みなとの～おおぶしは上から振り下ろして来るメロディですが～あてもない～はメロディラインが上昇します！特に～あて～の部分では思いっきり声に息を混ぜます。響きを抜く感じです。

頭蓋内の響きを抑えます！只、ここでは鼻腔に声を抜かないように！意味が違って来ます。

～もない～は特に～な～の言葉を強く当てます。～あても無い～事を強調する訳です。

今回は詩のスタイルから見たこの歌の唱法を取り上げて見ました。

歌謡曲の七五調の四行詩が七、五、七、五と進み最後の行では今回は破形になりますが、その表現は上記の通りです。上句に対して下の句の表現方法と捉えて歌うのも一つの表現の手法です。

尚男性が歌う表現法の積もりで

お伝えしましたが、女性が歌う場合はこの限りではありません。

女性が歌う場合は、女流の作詞であり、このメロディラインを一声、発すればそのトーンと音色で十分おんなの世界が演出されています。その様に市川先生が作っておられます。タイトル通り女性フェロモンに溢れた作品です。只、参考になるところがあれば大いに取り入れて見て下さい。